

一心寺かわら版

第三十号 平成二十六年一月発行

ホームページ (<http://www.jimyouzan-isshinji.com>)

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

旧年中はご助力を賜り誠に有難うございました。

みなさまにとつて明るい年となりますよう念じ上げます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

南無阿弥陀仏



「倍返し」に思う

昨年、人気を博したドラマ「半沢直樹」、銀行を舞台にした出世とお金を巡る人間模様が見どころでした。その中に出てきたセリフ「倍返し」が流行しました。劇中なら痛快ですが、現実にはやられたら倍にしてやり返すというのは怖いことです。また近年、オリンピックなど大きな試合で敗れた選手が「リベンジ」という言葉を発することが多くなったように思います。リベンジの意味を辞書で調べると「復讐する、あだを討つ、恨みをはらす」とあります。自らの力を出し切ることができずに敗れてしまったことを悔いて、次こそは悔いのないよう精一杯戦って勝利を目指す、という意味で



の発言だとは思いますが、ことば本来の意味から、打ち負かされた相手を怨みに思っているように聞こえてしまい、好ましいものではありません。

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である」との仏説に思いを致さなければなりません。お釈迦さまの一族である釈迦族は、コーサラ国に攻め滅ぼされました。ヴィドゥーダバ王の、母の出身である釈迦族から受けた仕打ちへの怨みに端を発していたそうです。まさに怨みに怨みをもって報いたのです。それを目の当たりにされたお釈迦さま、怨みの持つ怖さを実感されたことでしょう。

怨みはどこから起こるのでしょうか。それはほんの小さなことがきっかけとなって起こります。お釈迦さまは、「かれは、われを罵った。かれは、われを害した。かれは、われにうち勝った。かれは、われを強奪した。という思いをいだく人には、怨みはついに息むことがない」と説かれます。

例えば、「あの人があなたのことをこんな風に言っていたよ」と聞くと、「何故そんな風に私のことを思っているんだ」と怒り、ついには怨みが起こってきます。相手が軽く言ったことでも必要以上に重く受け止める、誤解が生じてしまうことも多々あります。昨今はメールなどのひと言から怨みが生じ、大きな事件となることも珍しくありません。相手は私の一面しか見ていないのだから誤解が生じるのは当たり前、人生というのは大なり小なり誤解をされていくものだと言えればよいのですが、なかなかそうはいきません。

本当に人間の付き合いというのは難しいものです。それがグループ、民族、国家となると大きな争いになり、戦争まで起こってきます。本来はちっぽけであったかも知れないけれども、この「怨み」というものは非常に大きな問題を孕んでいるのです。

お釈迦さまは、「かれは、われを罵った…害した…うち勝った…強奪した。という思いをいだかない人にはついに怨みが息む」

「勝利からは怨みが起る。敗れた人は苦しんで臥す。勝敗をすてて、やすらぎに帰した人は、やすらかに臥す」と説かれます。害された、敗れたと思う人は横になっても苦しみは続きま



日本テラワーダ仏教協会のスマナサーラ師(上)は次のようにおっしゃいます。

人間というのは、物忘れはものすごくひどいのには悪いことだけはしっかりと覚えていてるのです。あの人にこういふことを言われたと。人間というのは、不幸になるようにできているようなものです。他人に対して怒ったら、その人に対して怨みを持ち始めて、どんどん不幸になるのは自分の方です。自分が他人に対して怨みの心を持っていると、誰がひどい目にあうかということと自分なのです。怨みは身体の中に毒の成分を分泌しますから、自

分の身体と心が壊れるだけであって、相手にとつては何ということもないのです。言った人はとつくに忘れていくかもしれません。人間にはそのような特徴がありますから、気をつけた方がいいのです。他人の良いことを覚えておくことは素晴らしいのですが、悪いことだけはすぐ忘れてしましましょう。もし人に何か腹の立つことを言われても、すぐその場で忘れた方が幸せになれるのです。

お釈迦さまは、「戦場において百万人に勝つよりも、唯だ一つの自己に克つこそ、じつに最上の勝利者である。」と説かれます。自己に克つことができるなら安らかであるから勝利者と言うのでしよう。



親鸞聖人の師である法然上人は、漆間時国という押領使をしている地方豪族の子として生まれます。中央から派遣されて来た明石源内武者定明と勢力争いが起こります。法然上人が九歳の時、夜討ちを掛けられ、時国は深手を負います。その時、父親の枕元に呼ばれて「敵を恨ることなかれ」と諭され

ます。もしも敵を怨み報いれば相手の一族よりまた怨みを買う、それが代々続いて行って終わりが無い。怨みを持っていてはいつまでも苦悩の連鎖を断つことが出来ない。迷い苦しみを離れて救われる道を求めて行きなさい、との遺言でした。

法然上人は、この父親の言葉を受けて仏門に入られました。おそらく当初は怨みがあったでしょうが、どうにかして怨みから離れたいと願われたと思います。求めて行き着いた先は念仏ひとつ。自分も凡夫、相手も凡夫、何にもでき得ない罪深きもの同

士。阿弥陀仏の本願を信じる一人の凡夫であるということに徹して怨みを過去へと追いやってしまい、どのような者とも対等の関係で、平等に「共に一緒に行きましょう」と浄土への道を歩まれました。法然上人が師と仰がれた善導大師の言葉、「願はくは此の功德を以て、平等に一切に施し、同じく菩提心を発して、安楽国に往生せん」（法事で回向として最後に読誦）の心です。

親鸞聖人は、『教行信証』の中で「主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し怨みを結ぶ。これによりて、真宗興隆の太祖源空法師ならびに門徒数輩：（中略）：遠流に処す。」、当時の権力者が法に背いて怨みによって法然上人や自ら専修念仏の徒を処罰したことに触れています。それに対して聖人も怨みを覚えたことではない。しかし、何より法に背いてはいけない、それでは救われない。聖人にとって「法」とは「仏法」、「南無阿弥陀仏」。

「念仏は行者のために非行・非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ。ひとへに他力にして自力をはなれたるゆゑに、行者のためには非行・非善なり」『歎異抄』。これは私のおこなった行である、私が作った善であると考えてしまうと自らの力を慢心するようになります。他と比べて優れていると誇り、相手を打ち負かす。また逆に打ち負かされることもあり、怨みが起こることもあるでしょう。私には何の力も善もない、他力（阿弥陀仏の本願力）にすべてをあずけることによってこそ、安らかな浄土への道が開かれる。それは師であった法然上人から受け継いだお念仏だったのでしよう。

さて、倍にして返してよいのは何でしょうか。それは「恩」でしよう。先人は「恩を返すというけれど返しても済まないからこ

恩なんでしょう」と教えてくださいました。真宗門徒は事あるごとに恩徳讃「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし」『正像末和讃』を唱和してきました。苦しいことが多い人生、身を粉にするような、骨を砕くような中でもご恩に報いたいと深く思いを致しておられた先人には頭が下がります。オリンピック招致で話題となった「お・も・て・な・し」も良いですが、今年はお・か・げ・さ・ま」が流行することを念願し、報恩講を勤めさせていただきます。『お釈迦さまの言葉は「真理のことは感興のことば」中村元訳より』

秋季永代経報告

本年の秋季永代経は三十度にもなるかという暑さの中で勤められました。法話は大塚芳明師（まんのう町・常福寺）。

私たちは生まれながらにして、いのちを食して犠牲にしなければならぬ業を持っている。親鸞聖人はじめ昔の方々は、「地獄は必定」と受け取り生きてきた（地獄図のプリント（下）を配ってそれを解説）。南無阿弥陀仏とお念仏を称えていのちをいただきますと慚愧と感謝をもって生きて



